

第 10 回外国語ワーキンググループについて

2016 年 6 月 20 日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

9:30 から 11:30 まで文部科学省 3 階 1 特別会議室で行われた。
一般傍聴者は 40 名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 外国語教育の改善充実について
2. その他

まずは、資料 3-1「外国語ワーキンググループにおけるとりまとめ（案）」についての説明があった。前回の議論を踏まえ、また、他教科との横並びの関連・用語の整理などの視点から修正が加えられた。特に、大きな変更があった点は以下の通りである。

- 「育成すべき資質・能力の整理と、教科等目標の在り方」の項目の中に「小・中・高等学校を通じた指標形式の目標の設定」という見出しを作り、CAN-DO 形式の目標設定について強調した。
- 高等学校卒業段階で求められるレベルを CEFR レベルと指導語彙数として具体的に示した。
- カリキュラム・マネジメントについての教員一人ひとりの意識の必要性を明記した。
- 「小・中連携の改善・充実」という項目を追加し、その重要性を明記した。
- 「英語以外の外国語教育の改善・充実」について項目を追加した。
- 「国語教育と外国語教育の効果的な連携の意義」の項目において、「『言語能力の向上に関する特別チーム』において整理された内容を踏まえ」と記した上で、連携の必要性について記述した。
- 「特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実」の項目において、支援の実例を具体的に示し、学力格差を意識して個に応じた学習の必要性を明記した。
- 「必要な条件整備等について」の項目の中に「高大接続における外国語教育」の見出しを追加し、入試における 4 技能の評価を求めた。

10:00 頃よりとりまとめ（案）について意見交換が行われた。

育成すべき資質・能力について、知識・技能を重要視しているイメージが読み取れるので、思考力・判断力・表現力に重きをおく表現に修正した方がよいとの意見があった。また、小学校高学年の読み書きについても「慣れ親しむ」という程度ではなく、もっとしっかり理解した方がよいのではないかとの意見もあった。これについては逆に、子供は文字への抵抗が大きいので意欲が低下しないように慎重にすべきであり、文字は慣れ親しむ程

度で良いとの意見もあった。

高校卒業段階に求める英語力として、「CEFR A2～B1 レベルの達成が 50%の実現」では低すぎるのではないかと、目標は高く掲げるべきとの意見もあった。これに対して、直近数年で達成したいプランと指導要領改訂後に達成したいプランを分けて書かなければわかりにくいとの指摘もあった。また、語彙数の記述について、その数を提示するだけでなくどのような語彙を扱うかが重要であるので、アクティブに使いこなせるべき重要語彙の資料を参考につけてはどうかとの提案もあった。

小学校における短時間学習について、行事などでその時間がつぶれてしまった場合に未学習が生じる心配があり、もっと具体的なアイデアを入れたほうがよいとの意見があった。

小・中の連携については、CAN-DO リストを共有することが有効であることを盛り込んで欲しいとの要望があった。さらに、連携をすすめるためには、これまで校種別で作られていた学習指導要領を小・中・高の全体の流れがわかるようなものも作ってほしいとの要望があった。

国語科との連携について、「言語能力の向上に関する特別チーム」で整理された内容の記述があるが、そこでの議論は言語としてのメタ認知など知識を重要視しているのに対し、本ワーキンググループはコミュニケーションを通じた活用を重要視しているので、思想が乖離しており「特別チームの内容を踏まえ」の記述は言い過ぎではないかとの意見があった。

今回で本ワーキンググループでの議論は一旦終了となるが、多くの意見が出されたことからさらなる修正の必要性があり、メールでの意見交換を行いながら主査と主査代理を中心に修正を加えていくこととなった。その結果、6月28日（火）の企画特別部会にとりまとめ（案）として報告される予定である。